

イロイロ知りたい！ 心理学史

【第3回】

スタンフォード＝ビネ知能検査に みられるアメリカン・ライフ ルイス・ターマンのアメリカ版知能検査

サトウタツヤ



立命館大学文学部教授。前回予告通り、取材を敢行。困った時のクラーク大学詣で。自分で取材して撮影すればカラー写真が手に入ります。さて、次はどこにしようかな。
(似顔絵イラスト：A. Tanimoto)



写真1 これは何？

さて、これは何でしょう？ 英語で答えてください！！

答えられない？
じゃあ、あなたのIQは低くなりますよw

この道具は「Egg beater」タマゴ攪拌機です。1937年にターマン(L. Terman)が発表した知能検査「Revised Stanford Binet Scales」の検査用具の一つです。知能検査は心理学の最大の発明の一つであり、良くも悪くも近代社会を根底から支えてきたツールの一つです。

知能検査の母国はフランスです。当時のフランスでは知的遅れのある子どもを見出して、必要ならば特殊学級で少人数教育を受けさせるシステムをつくっていました。しかし、その抽出の仕方は、適切なものとはいえませんでした。母親に子どもの状態を尋ねるということが行われていました。いちばん近くにいるのだから、その記述は不正確とはいえませんが、20世紀初頭の心理学者ビネ(A. Binet)は、子どもに直接施行する形の知能検査を開発すべきと考え実行したのです。この検査は、すぐに各国に広まっていきました。同様の問題を抱えていたからです。

ところで、知能検査には日常的な知識を問う課題があります。学校に通っている子どもの得点が高

くならないように、学校に行っていない子どもでも答えられるような課題を用意したからです。これが、冒頭のタマゴ攪拌機の存在意義です。この工夫が移民(候補)選抜の際に排外的に働いたのはたいへん皮肉なことでしたが、それ以前の問題として、翻訳の問題がありました。もともとのフランス版知能検査の項目のうち、日常生活に近い課題であればあるほど、他国で使えないというジレンマを抱えていたからです。そこで、各国の心理学者たちは、翻訳版をつくる際、当時の子どもたちが常識的にわかる品物を、国ごとに知能検査へと組み込んでいったのです。その意味で、知能検査は文化歴史的に構成されたものであるといえ、過去の知能検査をみることは、国の文化をみるという行為に他ならないのです。

一方で、各国共通の課題もありました。「フォームボード(Form Board)」と呼ばれるもので、くぼみと同じ形の図形パズルを入れる課題です。写真2では、丸は丸のくぼみに入っていますが、三角形を四角のくぼみのところに入れようとして失敗しているところです。(イメージ写真：手の出演：前・心理学



写真2 フォームボード

ワールド編集委員 尾見康博先生)。

この検査を開発したターマンは、クラーク大学でホール(S. Hall)のもとで優秀児の研究を行って博士号を得ています。彼は1916年にビネの知能検査のアメリカ版を作成し、その際にIQという指標を取り入れたことでも有名です。ビネはIQということを考えておらず、IQを提唱したのはドイツの心理学者シュテルン(W. Stern)です。ターマンはそれを実用化したのであり、さらに約20年後に改訂版を出したのです。今回紹介した1937年版はその改訂版で、今もクラーク大学に残されていて、その一部の用具はアメリカンな知能検査のようすを私たちに伝えてくれます。

文献

サトウタツヤ(2006)『IQを問う』
ブレーン出版



写真3 様々な用具



写真4 これも何だろう？